高機能性食道癒症患者の心理教育的ニーズの発見Ⅰ
一内幕世界へのアプローチ-

大島 美紀*1,2 森山 聡*1 伊藤 良子*1

1 東京女子大学大学院
2 東京女子短期大学
3 教育研究部

キーワード: 高機能性食道癒症患者、内幕世界、心理教育、ニーズ

問題
近年、高機能性食道癒症患者の増加は注目されてきたが、もともと患者が抱える問題は少なく、その半分、すなわち40%の高機能者である事は公に示されることが多かった。これは、通常学校における高機能性食道癒症患者の存在が予想外に多い事、そして今後通常学校においても自閉症児を含む患者が増える事の出来ない問題である。以下に示している（石井、2001）。

高機能性食道癒症患者が学校生活においてまず見られる問題は、学習に課される問題である。彼氏等の友達と交流した高機能者と言った相手の障害の有無、両方からの会話の可能性、その他の話題の形成の可能性、興味をもつ相手の関心の範囲、交流の相手の理解の可能性、そして心理的負担の在り方についての子どもを含むケースが報告されている（中尾、2000）。

このような自己表現関係に生じる課題を持つ高機能性食道癒症患者が自閉症児を含むにもかかわらず、その特性を示すと考えられている。

過數例中の約20%に高機能性食道癒症患者が生活する状況が示されることをもとに、以上のような問題を解決するために、著者らは自己実現を含む相手の理解の在り方による心理的負担の有無と特異の内幕世界が詳細に扱われている。

しかし、高機能性食道癒症患者を対象とした自己実現研究は、途中にたどりてきられる。Hovland & Lee（1998）は、Demer & Hart（1992, 1988）の自己理解実習を高機能性食道癒症患者、自閉症児に対して行った結果、高機能者では有言

-41-
である。その内には、我々は臨床検査を通じてその内の内因を観察することが必要であるのではないか。そこで、米国で1954年2月3日に中心に示され、米国臨床検査師と医師の中間的な役割を果たす、臨床検査師間をいう役割を果たしている。また、臨床検査師が果たしている役割は、臨床検査師間をいう役割を果たしている。このような役割を果たしている。臨床検査師間をいう役割を果たしている。この役割は、臨床検査師間をいう役割を果たしている。因此、臨床検査師間をいう役割を果たしている。この役割は、臨床検査師間をいう役割を果たしている。この役割は、臨床検査師間をいう役割を果たしている。
(1) 基と被テスト
各説についてのテストとして実施。6×4インチの
紙の上に各説に該当するものを表し、「何の上
に長方形を書いて下さい」という指示を伝え実施。
(2) テストの結果
集団指導プログラムの1つとして集団で一斉実施。
1か月後の2回の番号を付けて、各説に該当する
項目をこっそり下に書き、指導者が全員に対して「名前に続く序文を
どんな事でも良いから書きこんで下さい」という指示を
与った実施。
①物の数値

<table>
<thead>
<tr>
<th>A児</th>
<th>B児</th>
<th>C児</th>
<th>D児</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
</tbody>
</table>

②頸の分析

<table>
<thead>
<tr>
<th>A児</th>
<th>B児</th>
<th>C児</th>
<th>D児</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
<tr>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
<td>〇</td>
</tr>
</tbody>
</table>

以上5段階分析を観察すると、B児は4名が2つのタイプに分類される。まず1つ目は「形式的タイプ」であり、A児とD児がこれに属する。一方、A児とD児は「感情顕著的タイプ」に属すると考えられる。

形式的タイプでは、頸部の数値が形式的であり、B児が最も高かった。感情顕著的タイプでは、A児が最も高かった。

B児

感情顕著的な傾向が強く、顕著な感情を示す傾向が強かった。特にA児とC児が顕著な傾向を示した。

図1. A児のアセットの結果

A児
(2) もの事実

（2）の影響

分析の結果、分析内容については未調査において20項目全ての記述が得られたので分析内容については特に分析対象とはしな
ない事とする。

記述内容については、Kuba & Maggiardino (1986) に示す「記述内容」（社会的集団や社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。

（3）記述内容について

記述内容についての分析方法を基にした、「記述内容」（社会的集団や、社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。

（4）トピック別に記述内容別の記述割合を示す。

「記述内容」（社会的集団や、社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。

（5）トピック別に記述内容別の記述割合を示す。

「記述内容」（社会的集団や、社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。

（6）トピック別に記述内容別の記述割合を示す。

「記述内容」（社会的集団や、社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。

（7）トピック別に記述内容別の記述割合を示す。

「記述内容」（社会的集団や、社会的集団を有するもの）と
（2）の影響（個人の生活・能力、関心、環境など
主観的な記述）とに分類し、さらに細かくカテゴリーを
投げた藤倉・別府 (2002) の研究に参考をしながら
行った。
している事はなぜそのTVに対する興味の強さを示してい
る。以上の2つの要因の分析結果を述べたが、これらは視聴
者が自己と他者との関係や社会集団的価値観において観
える視聴者として、自己の感情を表出した視聴者との関係と
する視聴者自身について記述する視聴者が強く
示された。こうした結果は、高橋根木氏の「視聴者集団
者の自己表現に関する先行研究における結果を一致す
るものである。また、本結果では視聴者が自己を観察
関連もみず、彼が様々な価値において自己を演じ
ている対象に示され、その対象によって実験の
違いの個人差というものを示されたのではどちら
か。例えば、A・B両者は同じように視聴に関する記述が
多く、C・D両者が同じ視聴に関する記述が少ない。
この事から20番台においても4名の被験者の観察は、
意識度と時間の関係に8名。E・F両者が、9名の2群に
分類され考えられる。表2を示す以下記述の分析についての分類(%)
参考文献


深尾、1975, 自己の力に関する研究, 日本教育心理学会学術研究集23号 自己出版, p. 420-421.

Death and Dying with Children, 1980, Springer, N.Y.


東上政男, 1984, "自己の理解管理一実践的・抽象的ハリウッドダイジェスト 金子文雄

井上, 2000, "実践的経験, アンシェル発達障害児に, 育ける自己理解の特性, 日本児童青少年心理学会第43回学術大会, p. 188.

長谷川, 2000, "実践的経験, アンシェル発達障害児に, 育てる自己理解の特性, 日本児童青少年心理学会第43回学術大会, p. 188.

--

-48-
Examination of the Psychoeducational Needs of Persons with HPPDD

—The Inner World Approach—

Miki OOSHIMA1  Tetsu MORIYAMA2  Rysko ITO3

1Tokyo Gakugei University
2Showa University of Music
3The Research Institute for the Education of Exceptional Children

Key words: HPPDD, inner world, Star-Wave Test, 20-statement tests

The purpose of this study was to examine the validity of ‘Star-Wave Test (SWT)’, which is a projective drawing test, and ‘20 statement tests’, which is a standardized psychological test, when approaching the inner world of 4 adolescents with HPPDD.

By the SWT, their overall inner world, which supports their characteristics in daily life, and their unconscious conflicts, which are not put into words, were shown through a picture.

On the other hand, by ‘20 statement tests’, it is possible to grasp relations between themselves and the object of their self-consciousness more concretely, and this result supports the results of SWT.

The validity of approaching the inner world of a person with HPPDD was suggested by using ‘SWT’ and ‘20 statement tests’ together in this research, as described above.

It is now necessary to increase the number of cases and to examine further the validity of these tests.

- 49 -